

## 材料別分科会とデータベース構築との関わりについて

鈴木峰晴

(材料別分科会 電子材料グループ幹事)

N T T境界領域研究所

243-01 神奈川県厚木市森の里若宮

現状では表面分析研究会の会員は、材料別分科会の4グループ(無機, 有機, 金属, 電子)のいずれかに属し活動して(いただいて)おります。ここで(いただいて)と書かせていただいたのは、本活動において各グループに数名いる「幹事」とグループ員の間、もしくは幹事の間、意思疎通がうまくいっていないのではないかと心配するからです。

と言うのは、先般ある会員の方から次のような意見をいただいたからです。「材料別分科会の意義に疑問を感じ、データベースの将来展望にそれほど期待が持てない。」言い換えると「材料別分科会の目的をもう少しクリアにし、将来データベースが、我々の実務にどのように生かされるのかの青写真をもう少し議論して、ある程度コンセンサスをとって進めることを希望する。」というコメントです。

各グループの幹事、データベース委員会の関係者と意見交換すべきだったかも知れませんが、ここに私見を述べさせていただき「議論の種」になればと考えております。

まず、前提としなければならないのは、「材料別分科会」の活動と「データベース構築」の活動は本来リンクしていないということです。「材料別分科会」の幹事の間でも「DBのためのきれいなスペクトル」とか「DBに耐えうるスペクトル」という発言が時々出ますが、私は賛同しかねます。材料別分科会の目的は、同種類の材料に親しんだ会員が「興味ある材料を測定・解析するのに、どのような問題

点があるか。どうやれば解決できるか。」を共通課題として考えることだと考えています。この観点に立って、材料毎順々に推奨測定手順を作りあげていくことが活動となります。会員、機関によって経験度等が違いますから、時間がかかるかも知れませんが地道に進めていきたいと思っております。

一方、表面分析研究会の存在を確固たるものにするためには、外部から価値を認められる必要があります。「データベース構築」に関してはそのような事情の中で、日本および海外の状況から判断して急ぐべき点があるとの判断で進められてきたものと思います。昨年は両者の動きが連動して、材料別分科会で測定されたデータがデータベースの一部をうめることになりました。この状況が先に述べた意見を生むことになったのだと思います。

材料別分科会の立場では、決して「データベース」のための測定ではなく、自分たちの問題を解決するための測定だと考えるべきです。問題解決のための検討中に、もし新たに大きな問題が見つかったならどんどんそちらを進めるべきです。

しかし、測定手順の標準化はデータベースとは無関係ではないはずですが。「データベースのもたらす青写真」を示す力は私にはありませんが、相互に有機的な関係をもちつつお互いが発展していくものと考えています。

「材料別分科会」、「データベース」のいずれもが、その存在価値を示し、上手な利用方法が登場してくるのはこれからだと考えています。本研究会のすばらしい点は、できるだけ官僚体制に陥らないように活動していることです。各委員会の幹事をはじめ、会員の皆さんの意見をまじえて、各活動が前進することを期待します。